

信州大学病院「死の臨床を学ぶ会」が 当院のターミナルケアに与えた影響

「死の臨床を学ぶ会」世話人：

牧野 浩子・百瀬 領子・高橋恵美子
矢野口宏子・池田てるみ・近藤 東

1. はじめに

最近、有名人が「私の病気は癌です」と公表したり、「癌と闘い壮絶な死を遂げた」などという話題をよく耳にする。「尊厳死」という言葉も使われるようになって久しい。そんな平成三年の医学展において、現代医療と「ターミナルケア」分科会が一末期癌患者の診療・看護に関する調査を行った。この調査がきっかけとなり、信州大学病院「死の臨床を学ぶ会」（以後「死の臨床を学ぶ会」と略す）が平成四年一月にスタートした。

「死の臨床を学ぶ会」は、大学病院の中で、一般市民と院内外の医療従事者が一堂に会して、すべての人々に共通する死の問題を考え、患者中心の医療ができるようになることを目的としている。毎月一回定例会として、講演会や討論会を開催している。院外からの参加が多く、一般市民も数多く参加している。世話人やボランティアでも非医療従事者の活躍が目立つ。

当院の看護婦の「死の臨床を学ぶ会」定例会への参加は、平均18.8%¹⁾であり、院内の参加者の割合も徐々に減っている。これは、一般市民や、院外の医療従事者の関心が高まっているためでもあるが、医療の実践者である院内の参加者数が伸び悩んでいる。この点においても、今までの「死の臨床を学ぶ会」の活動を振り返り、評価する必要があると考えた。

2. 研究目的

「死の臨床を学ぶ会」の活動が、当院の看護婦の意識や、ターミナルケアに与えた影響を知り、今後の活動を意義あるものにする。

3. 研究方法

調査対象：信州大学医学部附属病院に勤務する看護婦 381名

有効回収数 273 (回収率71.7%)

調査方法：質問紙留め置き法

調査期間：1993年7月14日～23日

- 調査内容：
- 1 「死の臨床を学ぶ会」定例会への参加状況
 - 2 「死の臨床を学ぶ会」定例会へ参加しなかった理由
 - 3 「死の臨床を学ぶ会」定例会参加者の意識の変化
 - 4 「死の臨床を学ぶ会」定例会が一般市民をまじえ病院内で行われていることに対する見解
 - 5 「死の臨床を学ぶ会」の通知やポスターについての見解

- 6 「死の臨床を学ぶ会」の当院の医療への影響についての見解
- 7 ターミナルケアについての見解

4. 研究結果

※注 %は特に断りのない場合は、全回答者に対する割合を示す

1. 「死の臨床を学ぶ会」定例会（以後、定例会と略す）への参加状況

- ①定例会へ参加したことがある者は、123名で45.1%であった。
- ②調査期間までの全17回の定例会のうち、最も多く参加した者は16回で2名、少ない者は1回で51名であった。
- ③延べ参加回数は415回で、参加したことのある者の平均参加回数は、3.4回であった。

2. 定例会へ参加しなかった理由

- ①定例会に参加しなかった理由は、複数回答で、「勤務の都合で出られなかった」が最も多く、参加したことのない者の73.1%（106名）であった。「定例会の時間帯が悪い」も多く、38.6%（56名）であった。

3. 定例会参加者の意識の変化

- ①定例会に参加したことのある者で、参加したことで自分自身の中に「何か変化があった」と感じている者は、「少しあった」と感じている者も含め、83名（67.5%）であった。

②主な変化の具体的な例は、

※注 a～dは、記述されている意見を研究者が大まかに分類したものである

a：ターミナルケア・看護観について

- ・ターミナルケアを充実させたいと思うようになった。
- ・看護観がいくらか変化した。
- ・患者の気持ちを深く考えるようになった。

b：人生観・死について

- ・“死”とは、“生きる”とは、について考えるようになった。
- ・死に直面しないと、死や生について考えない自分に気がつき、生や死について考える時間や教育の必要性を感じた。
- ・“人は生きたように死んでいく”ので、一日一日「生」を大事にしたいと思うようになった。

c：ペインコントロール

- ・麻薬の量は気にしないで、癌の痛みが消失するまで、使用しても良いのだということ、自信を持って話せるようになった。
- ・癌の痛みは当たり前で、苦しんで死ぬのが癌だと思っていたが、痛みを感じさせてはいけないと思うようになった。

d：その他

- ・勉強する心構えができた。

・今までのいろいろのことを振り返って考えることができた。

等であった。

③自分自身の中の変化について感じている者の割合は、参加回数が多くなるほど増えていた。
(図1)

4. 定例会が一般市民をまじえ病院内で行われていることに対する見解

①定例会が一般市民と一緒に病院内で行われていることを、「大変意義がある」としている者が、複数回答で79.1% (216名) であった。216名のうち半数以上の109名は、定例会に参加したことのない者であった。

②主な具体的な意見は、

※注 a～eは、記述されている意見を研究者が大まかに分類したものである
<定例会に参加したことがある者>

大変意義がある

a：患者・一般市民の意見を聴ける。

- ・一般市民の意見を聴くチャンスが他にない。
- ・医療者だけでは、片寄った考えが出そう。
- ・医療者だけの考えより、もっと広く考えられる。

b：相互理解ができる

- ・医療者と患者とのギャップが少しでも埋められると思う。
- ・よい交流となり、お互いの意見交換、考え方など理解しあえる。

c：医療者への刺激になる

- ・一般市民が参加していることで、院内のナースなどの意識、関心が高まる。
- ・患者サイドの意識改革が医療を変える力になると思う。

d：一般市民への啓蒙になる

- ・一般市民が医療に対してなすがままになってはいけい。人間の尊厳は守られなくてはならないことに気づくことができる。
- ・病気をもっている人だけの問題ではない。
- ・死とは医療者だけの問題ではない。
- ・死を迎えることに対して、患者の意識も高めなければならない。

e：その他

- ・一般の人々が気軽に参加できること自体に意義がある。
- ・私たちも一般市民である。
- ・今までなかった集まりであり、皆が避けられない“死”がテーマであるから。
- ・患者として、家族としての経験を自由に、遠慮なく話せる場が必要だと思う。

あまり意義がない

具体的な意見の記載はない

問題があると思う

- ・時と場合によっては、医療者だけの方がよいと思う。

- ・癌を告知されず、治療している患者、疑いを持っている患者にとって、どういう場であるのか？

#その他

- ・医療者としてのターミナルケアの基盤がしっかりしていないので、そこをもっと深めた方がよいと思う。
- ・テーマに関して、全部を市民と一緒にしなくてもよい。

<定例会に参加していない者>

#大変意義がある

a：一般市民の意見を聴ける

- ・一般の人がどんなことについて考え、悩んでいるか知ることができる
- ・医療者以外の人からの意見は大切だと思うから。

b：相互理解ができる

- ・医療者または一般市民の考えに片寄らないところ。
- ・医療を受ける側が、医療関係者の考えを聴けるとするのは大切だと思う。
- ・スタッフ側と家族との意見交換の場。

c：医療者への刺激になる

なし

d：一般市民への啓蒙になる

- ・死についてすべての人が考えるべき。
- ・医療関係者だけではなく、一般の人にもターミナルケアに関心を持ってもらえるのは良いことだと思う。
- ・医療者のみの問題ではないと思うので、一緒に聴く必要がある。

e：その他

- ・地域に開かれた病院となるのではないかと思うため。
- ・社会にいろいろな意味で還元できる。

#あまり意義がない

- ・病院での死について、疑問を持っているため。

#問題があると思う

- ・理解してもらわなくてもいいことまで分かっていると困ってしまう。
- ・スタッフと市民とでは、認識に差があると思う。

#その他

- ・内容にもよると思う。

等であった。

5. 「死の臨床を学ぶ会」の通知やポスターについての見解

- ①定例会の通知を「必ず見る」者は105名 (38.5%)、「時々見る」者は130名 (47.6%)であった。
(複数回答)
- ②定例会のポスターについて「大変良いと思う」者は140名 (51.3%)、「貼る場所に問題がある」

と思っている者は40名 (14.7%) であった (複数回答)。

- ③大学病院内で、死について掲示したり語ることは『とても大切で必要なことだと思う』者が218名 (79.9%) であった。

6. 「死の臨床を学ぶ会」の当院の医療への影響についての見解

- ①「死の臨床を学ぶ会」が院内で行われていることで、当院の医療が『大いに变化した』と思っている者は7名 (2.5%) であり、『少し变化した』と思っている者は102名 (37.4%) であった。
- ②当院の医療が『变化した』と思っている者109名のうち、定例会に参加していない者は51名であった。
- ③医療の変化を感じている者の割合は、定例会参加回数が多くなるほど増える傾向があった。(図2)
- ④病棟別で、定例会に参加したことのある者の割合と、医療の変化を感じている者の割合には、相関関係はなかった。(図3)
- ⑤病棟別で、定例会への延べ参加回数と、医療の変化を感じている者の割合にも相関関係はなかった。(図4)
- ⑥具体的な変化としては、『苦痛緩和について、影響があった』が43名 (15.8%) で最も多く、以下『モルヒネの使用量が増えた』30名 (11.0%)、『告知について影響があった』27名 (9.9%) と続いた (複数回答)。

意見の例は、

#告知について影響があった。

- ・チーム内で討議されることが多くなり、医師も参加するようになった。告知されたい家族への対応が検討された。
- ・告知するケースが増えた。

#苦痛緩和について、影響があった。

- ・効果的な鎮痛方法が学べた。
- ・患者の苦痛に対して、スタッフが積極的に対応するようになった。
- ・痛みは我慢させないという意識が定着してきた。
- ・参加されていた方の意見が、ターミナルケアにもりこまれた。
- ・とにかく延命より苦痛緩和を優先する。

#モルヒネの使用量が増えた。

- ・Ns から Dr へ麻薬の使用をすすめる。
- ・使用量を気にせずに増量できる。

#インフォームトコンセントがとられるようになった。

- ・重要性が理解され、患者家族に理解できるような説明をする。
- ・以前より良く説明している。

#ターミナル期の心肺蘇生術に変化が見られるようになった。

- ・患者や家族の意志を優先する。
- ・家族と話し合いが充分でき“見守る”というケースも出てきた。以前では考えられないこ

とである。

- ・最近心肺蘇生しなくなった。

#家族のケアに変化がみられるようになった。

- ・患者ばかりでなく、家族に対するケアを以前より大事にする。
- ・家族と一緒にケアするという姿勢が出てきているように思う。
- ・ナース側からファミリーへの働きかけに変化があったと思う。具体的にどのように声かけすれば良いか考えることができるようになった。

#その他

- ・Drへ働きかけることができるようになった。
- ・具体的は不明。時代の変化による影響大と思える。
- ・自分自身の考えが変わり、主治医に自分の意見を言え、それが実現できることが多くなった。
- ・気持ちの中では変化しているが、実際面でははっきりとした形で見られない。今後の課題だと思う。
- ・看護婦の方から、積極的にDrに提言し、患者にとってよいターミナルケアについてカンファレンスができるようになった。
- ・自分の意識が変わったので、ターミナル期の患者さんのために、今何が必要なのかなど意識的に関わられるようになった。
- ・同僚と患者の生死について語り合う機会が増えた。医師にも自信を持って意見が言えるようになった。

7. ターミナルケアについての見解

- ①当院におけるターミナルケアを『先端医療と同等に重要と思っている』者は137名(50.2%)で、『先端医療が優先されている』と思っている者は108名(39.6%)であった。
- ②ターミナルケアにおいて、看護婦は『積極的に患者、家族に関わっていく必要がある』と思っている者は185名(67.8%)であり、『チーム医療を行うためのコーディネーターの役割を果す必要がある』と思っている者は59名(21.6%)であった。
- ③当院で患者が望むターミナルケアを行うために『症状緩和チーム』があつたらいいと考えている者は128名(46.9%)で、『院内学習会』があつたらいいと考えている者は94名(34.4%)であった。

5. 考 察

1. 看護婦の意識の変化

定例会への参加回数が多い者ほど、主観的な変化を感じている。その内容としては、医療従事者としてターミナルケアや看護に対する考え方の変化もあるが、自分自身の問題としての死生観、人生観にも影響を受けている。また、癌性疼痛のとらえ方及び具体的なペインコントロールの方法について、認識を新たにした者が多かった。その道の第一人者の講演を聴いたり、人生の達人を含む一般市民や患者、家族などの多くの人々の意見に触れることで、死生観・看護観に影響を

受けているものと考え。数多く参加することで、様々な知識を得、様々な意見を聴いて、この影響をより強く受けるものであろう。

2. ターミナルケアへの影響

定例会への参加回数が増える程、医療の変化を感じている者が増える傾向はある。しかし、実践の場である病棟別にみると、定例会への参加と、医療の変化を感じている者の間に相関関係はなく、「自分自身の変化」と「医療の変化」とは結びついていない。これは、主観的な意識に変化があった者（看護婦）が医師と対等な立場で医療を行えていないため、変化につながりにくいものと考え。現実には、定例会に参加している当院の医師は、平均で全参加者の4.9%¹⁾にすぎず、看護婦の18.8%¹⁾をかなり下回っており、医師の、意識の変化はあまり期待できない。また、定例会に参加していない者も「医療の変化」を感じているのは、定例会参加者の影響もあるが、社会全体の医療に対する意識の変化にも影響を受けていると考えられる。「死の臨床を学ぶ会」は社会の流れを受けて発足し、時代の流れと同時に動いており、「医療の変化」がこの会の活動による影響とは、今回の調査からは実証できない。しかし「医師にも自信を持って意見が言えるようになった。」とか「自分自身の考えが変わり、主治医に自分の意見を言え、それが実現できることが多くなった。」という意見は心強い限りである。

3. 「死の臨床を学ぶ会」の活動に対する評価

症状緩和とか患者・家族への接し方など具体的な事項に関し「死の臨床を学ぶ会」の影響と思われる意見があった。このことより、具体的な情報を提供することは有益であると考え。一般市民の参加は、定例会参加者に良い影響を与えている。また、定例会に参加していない者もその意義を認めているが、具体的にどんな変化をもたらしているのかは、今回の調査では明らかになっていない。定例会参加者の主観的な意識の変化はあったが、意識の変化が具体的な医療の変化に結びつくには時間が必要であり、この会の活動を継続していくことが大切であると考え。院内の医療従事者の定例会への参加の割合が少ないことや、今回の調査で「死の臨床を学ぶ会」に対する要望がほとんどなかったことは、今後の課題である。

これからも今までの活動を続けていく一方、一般の人々に対してだけでなく、医療従事者に対し具体的な情報を提供できるような、院内学習会とか症状緩和チームといったような企画も考える必要がある。また今回の調査では具体的なターミナルケアの変化について明確にできなかったため、この点についても再検討をする必要がある。

6. まとめ

信州大学病院「死の臨床を学ぶ会」の活動が当院の看護婦の意識やターミナルケアに与えた影響を知り、今後の活動の参考にするため、当院の看護婦381名に質問紙留め置き法で調査を行った。

その調査から、以下の結果を得た。

- 1 定例会への参加回数が多い者ほどターミナルケアや看護に対する考え方、自分自身の問題としての死生観・人生観等に変化があった。
- 2 定例会への参加と、医療の変化の間には相関関係はなかった。

3 症状緩和とか患者・家族への接し方など具体的な事項に関し影響があった。また一般市民の参加は、定例会参加者に良い影響を与えている。

この結果より次の考察を得た。「死の臨床を学ぶ会」定例会へ参加することで主観的な意識は変化した。しかし、現在看護婦は医師と対等な立場で医療を行えていないことと、意識の変化が具体的な医療の変化に結びつくのには時間が必要であるため、看護婦の意識の変化は医療の変化になかなか結びついてこない。以上により、「死の臨床を学ぶ会」の活動を継続していくことは意義があると考ええる。さらに、今後は一般の人々に対してだけでなく、医療従事者に対し具体的な情報を提供できるような企画も必要である。

この研究にあたりアンケートに御協力いただいた看護婦の皆様に関心より感謝致します。

7. 引用・参考文献

- 1) 信州大学病院「死の臨床を学ぶ会」世話人会：定例会参加者一覧,
信州大学病院「死の臨床を学ぶ会」会報 News Letter Vol. 1～17, 1992～1993

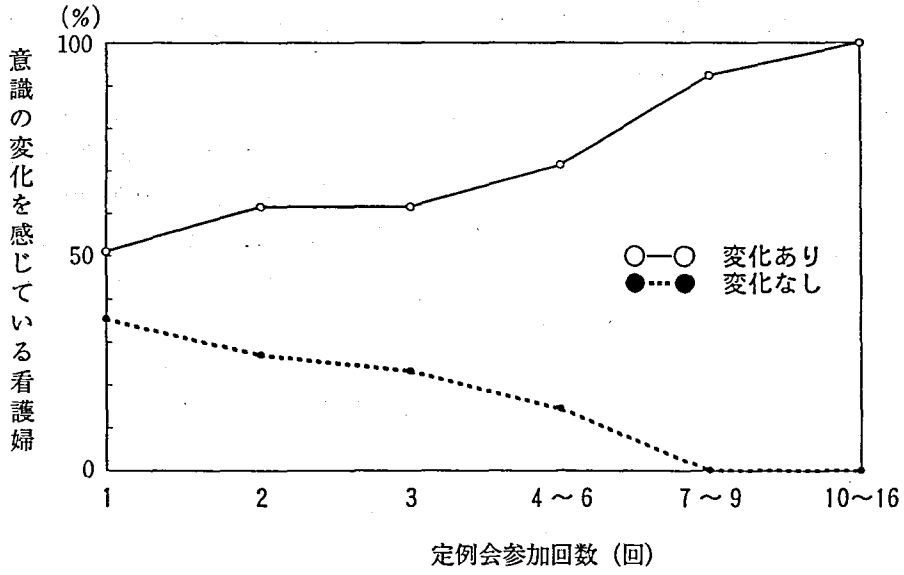


図1 定例会参加回数と意識の変化を感じている看護婦の割合

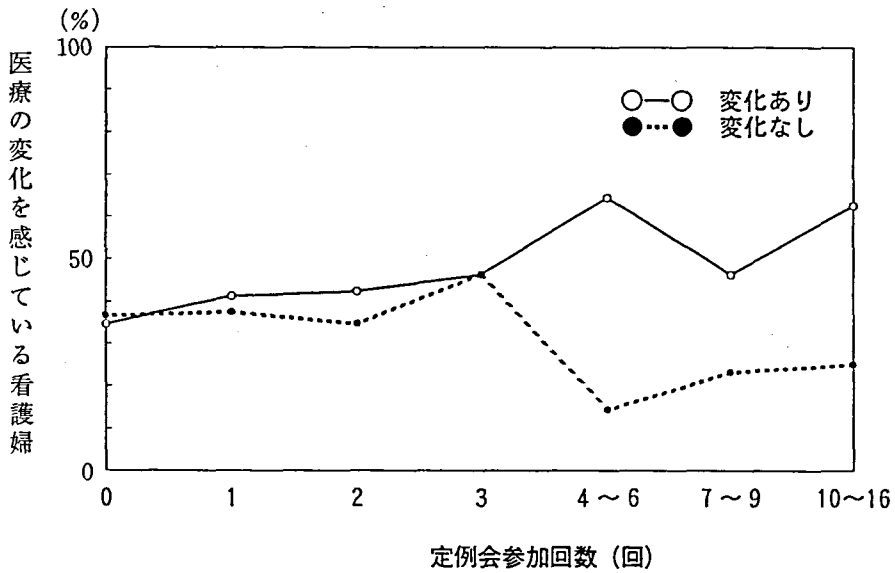


図2 定例会参加回数と医療の変化を感じている看護婦の割合

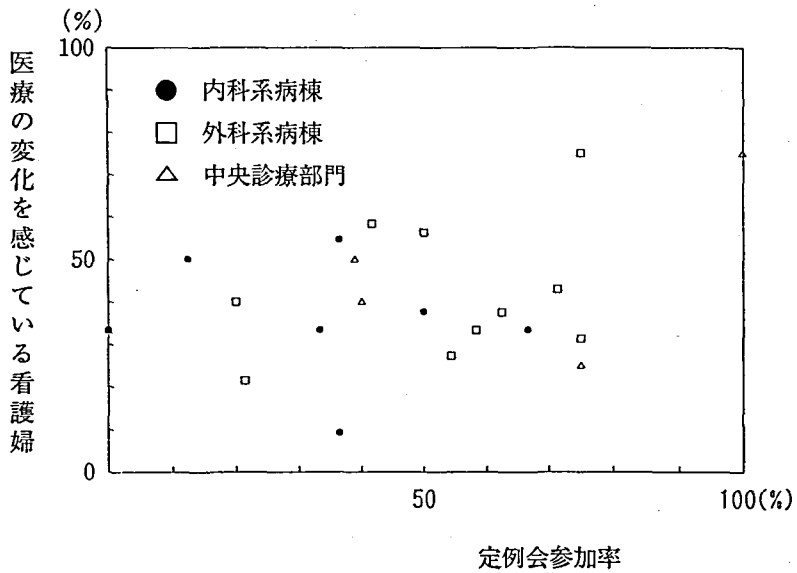


図3 病棟別定例会参加率と医療の変化を感じている看護婦の割合

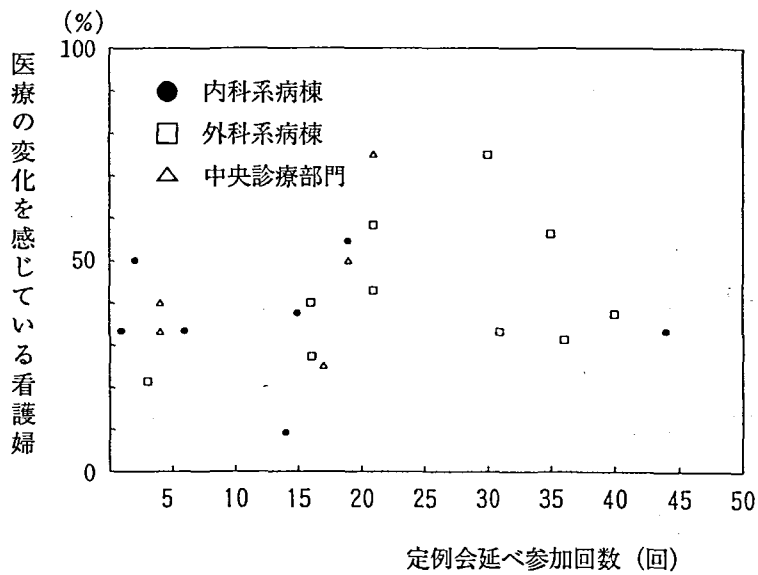


図4 病棟別定例会延べ参加回数と医療の変化を感じている看護婦の割合